

日点委通信

No.23

2007年11月1日発行

日本点字委員会総会報告

日本点字委員会は、2007年6月2日・3日の両日、京都市北区の京都ライトハウス及び上京区のザ・パレスサイドホテルにおいて、第43回総会を開催し次の事項を協議した。

1. 漢字や仮名で書き表された単位の表記について

2004年の第40回総会から3回にわたって検討されてきた結果を踏まえて、東北点字研究会と関東地区小委員会から次のような提案がなされた。一般の文章中での漢字や仮名で書かれた単位をすべてひと続きに書くという単一のルールで扱うのではなく、①物理量を表す単位と貨幣単位などとは区別し、②同じ内容を表す単位でも書き表され方で切れ続きが異なる場合があるということを前提に、「物理量を表す単位は数字に続けて書く」「二つ以上の自立可能な意味の成分を含むものは複合名詞の切れ続きの原則に準ずる」「貨幣単位などは複合名詞の切れ続きの原則に準ずる」「平方・立方は後ろの単位とひと続きに書く」「毎の付く単位は毎の前で区切って書く」といった五つの原則にまとめ具体例と共に提示した。数字の後の切れ続きなどに課題があり、決定には至らなかったが、「日本の点字」第32号に掲載し広く意見を聴取することとした。

2. 「くるま□いす」という切れ続きについて

尾関育三氏から、複合語の切れ続きに関して「車椅子」を切ったり「図書館長」にマスあけを入れたりする不自然な表記が多くなっているという疑義の表明があり、『点字表記法』『点訳のてびき』『点字表記辞典』にかかわって意見交換がなされた。

3. 医学用語の点字表記について

第15回あはき国家試験問題の点字表記についての調査報告が岩屋芳夫氏からあり、次いで宮村健二委員から標記の提案がなされた。1990年の第30回総会からの検討の経過についての説明の後、医学用語における2拍以下の自立可能な意味の成分の切れ続

きに関する運用基準（案）が提示された。提案の趣旨を、①誰が書いてもいつ書いても同じ表記になること、②類例間に整合性がある表記であることの2点に置き、医学用語のうち生体に関する用語の2拍以下の自立可能な成分の切れ続きを構造名・形態名・現象名ごとに整理した提案であった。提案内容についての質疑の後、設置が予定されている医学用語点字表記専門委員会に協議を委託することとした。

4. 医学用語点字表記専門委員会の設置について

医学用語における点字表記の統一を専門的な立場から検討し、一般の点字表記との整合性も加味した表記基準の作成に当たる専門委員会として標記の委員会を設置することとした。専門委員には、岩屋芳夫・工藤滋・栗原勝美・疋田泰男・宮村健二・和久田哲司・渡辺勇喜三の7名が推薦され承認された。委員長は渡辺勇喜三委員に委嘱した。

5. 委員の交替について

全国盲学校長会代表の学識経験委員は、伊藤和男氏（千葉県立千葉盲学校）から井口二郎氏（千葉県立千葉盲学校）に交替した。

6. ルイ・ブライユ生誕200年記念事業について

木塚泰弘会長から、2009年1月4日のルイ・ブライユ生誕200年記念日に向けて、点字の普及を推進する記念事業を企画したい旨の呼び掛けがあった。

『試験問題の点字表記 第2版』刊行

試験問題の点訳は、墨字の原問題をそのまま点字化すればよいといった単純なものではない。限られた時間内に集中して読み、効率よく解答作業ができるような配慮を適切に加えなければならない。それは、点訳に当たってのレイアウトの仕方から記号符号類の細かい使い方まで多様な分野にわたっている。

今回刊行の第2版は、部構成や章節を整理・統合したほか、主として次のような事項について加筆・修正を行った。試験問題における点字表記の基本的な在り方については序論で強調、近年多くなりつつある図表の点訳についての配慮事項への加筆、英語問題における斜線の点字化についての変更と留意事項の再整理等である。また、特別支援教育の推進に伴って、通常の小・中学校等で実施されるようになると予想される点字試験の在り方について、巻末の参考事項の一つに加えて記述した。




墨字版は日本点字図書館用具事業課扱い・定価840円（税込・送料は定価の5%）、点字版は日本点字図書館点字製作課扱い・定価4,000円（送料無料・原本価格800円）

『資料に見る点字表記法の変遷 — 慶応から平成まで —』 の発行について

日本点字委員会創立40周年記念事業として、11月1日に、『資料に見る点字表記法の変遷 — 慶応から平成まで —』が発行されることとなった。点字はどのように日本に伝わってきたのか。翻案以来、どのような表記法の変遷をたどって、今日に至っているのかを、当時の資料を見ることによってあとづけてみようという試みである。最初に墨字版を出版する。日点委の出版としては、点字・墨字同時発行が原則であるが、江戸末期から今日に至るまでの多くの資料を扱うため、墨字版の編集に手間取ってしまった。墨字版発行後できるだけ早く点字版の出版に着手したい。墨字版3,500円＋税。発売・(株)大活字。注文すれば一般書店でも購入できる。

その中からいくつか紹介したい。

点字を最初に日本に紹介したのは、イギリス、フランスに派遣された幕府の外国奉行に随行した岡田^{せつぞう}攝藏で、1865年（慶応元）のことである。パリ訓盲院の後身、少年訓盲院を見学した岡田は、《盲人に教ゆるに一種の^{しよせき}書籍を設く。文字を以てせず、紙の面に^{たか}凸く小^{いん}點を印し、例へばイの字を印すれば ●の^{しるし}印をなし、●●をロとなすが如く》と記している。

次いで点字を紹介したのは、パーキンス盲学校を見学した^{めが たたねたろう}目賀田種太郎で、1879年（明12）のことである。目賀田はいくつかの視覚障害者用文字を比較して、《ブレイル氏ノ方法ハ容易ニ我邦ニ採用スルコトヲ得ベシ》とし、もし日本語に採用するなら、字の形が似ているから、「イ」、「ロ」、「ハ」がよいだろう、と文字の翻案まで提案している。

1890年（明23）11月1日、東京盲啞学校で開催された点字選定会において、石川倉次の案が採択され、今日に至っている。どの案がよいかを検討した点字選定会には、教員に加えて、生徒が正式に参加し、教員と対等な資格で意見を述べ、審議に参加している。また提出された案の一つは、生徒のものであった。教師と生徒が一丸となって、これからの視覚障害者の文化のために、少しでもよいものを創造しよう取り組み、努力したのである。4回にわたって開催された「点字選定会」の記録をご覧ください。ことにより、そうしたドラマを味わっていただくことができると思う。

最初に点字印刷された「大婚廿五ノ春ヲ祝シ奉ル（訓盲字本）」1894年（明27）など、39点の資料を収集し、解説を付している。どうかご期待いただきたい。